

日本中東学会ニューズレター

JAMES

NEWSLETTER

No. 100

1/25 2005

目 次

2005/2006 (第 11 期) 役員選挙の実施.....	1
2004 年度第 2 回理事会報告.....	3
第 8 回公開講演会報告「中東における紛争と平和構築」.....	5
アジア中東学会連合 (AFMA) 第 5 回プサン大会報告.....	9
国際アラビア語方言学会 (AIDA) に参加して(石原忠佳).....	25
日本中東学会年報 (AJAMES) 第 21-1 号 原稿の締め切りについて他.....	31
第 21 回日本中東学会年次大会研究発表応募状況など.....	32
日本学会事務センター破産後の対処について.....	32
寄贈図書.....	33
会費納入のお願い.....	34
事務局より.....	34

2005 / 2006 年度 (第 11 期) 役員選挙の実施

日本中東学会会則第 8 条および細則 VIII.に基づき、2005/2006 年度 (第 11 期) 役員選挙が実施されます。先に、メーリングリストでもお知らせしました通り、有権者は、2005 年 1 月 20 日までに 2004 年度会費を納入した正会員 (退会予定者を除く) となります。各会員にはすでに 2005 年 1 月 1 日現在の暫定有権者名簿、また 2004 年度会費未納の方には振替用紙を郵送いたしました。

理事会の指名により、次の方々が選挙管理委員に委嘱されました。

菊池忠純会員（選挙管理委員長）

江川ひかり監事

小田淑子会員

中村覚会員

今回の役員選挙の日程は次の通りです。皆様のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

< 日程 >

- 1月20日（木） 役員選挙有権者資格のための2004年度分会費納入最終締切。
これに基づいて、最終有権者名簿を作成します。
- 1月27日（木） 評議員選挙のための投票用紙を発送。投票用紙を紛失した場合有権者は2月3日（木）までに選挙管理委員会に連絡すれば再交付を受けることができます。
- 2月10日（木） 投票用紙の受付締切（必着）。
- 2月14日（月） 評議員選挙開票。
- 2月21日（月） 評議員当選者に理事選出のための投票用紙を発送。
- 2月25日（金） 理事選挙受付締切（必着）。
- 2月28日（月） 理事選挙開票。
- 3月中旬 新旧合同理事会、新会長・事務局の選出および引継ぎ。

< 役員選挙関連の会則と細則 >

会則第8条

- （1）会長は理事の中から、互選によって定める。
- （2）評議員は一般会員の中から、正会員の投票により選任する。
- （3）理事は評議員の中から、互選によって定める。但し、理事会は会員の中から特定の任務など必要に応じて理事若干名を追加することができる。
- （4）監事は理事会の推薦をへて、総会において選任する。

細則 VIII. 役員選挙について

- 1. 理事会指名による4名（監事1名を含む）が選挙管理委員会を構成するものとする。選挙管理委員会は、評議員、理事の選挙を実施・管理するものとする。
- 2. 選挙によって評議員50名以内、理事9名を選出するものとする。
- 3. 同点の場合の選出法は、抽選によるものとする。

2004 年度第 2 回理事会報告

第 2 回理事会が開催されました。概要は以下の通りです。

日時：2004 年 10 月 30 日（土）10:00-13:00

場所：学術総合センター 会議室 201

出席：小杉泰、臼杵陽、飯塚正人、大塚和夫、小松久男、酒井啓子、長沢栄治、
林佳世子、三浦徹、湯川武の各理事

欠席：羽田正理事

事務局より出席：森尚子

【議題】

0. AJAMES の編集（31 ページに関連記事）

- ・ 20-1 号は刊行がやや遅れている。依頼量が増えたことと校閲者の単価が上がったことにより、校閲料が増加している。
- ・ 20-2 号については投稿原稿もあり、特集企画も進行中である。
- ・ 21-1 号については、締切を 3 月半ば頃とする。
- ・ 今後、査読については、査読者は非公開、査読方法は公開とした上で、内部・外部（編集委員会内外）という区別を明確にし、会員にも積極的に査読を依頼する方針が確認された。
- ・ 三浦理事より、別枠の科研費を申請して AJAMES の電子ジャーナル化を実現したいとの提案があり、理事会としては科研費の申請を了承し、技術的なことも含め、有償配布部数減少への対処、閲覧料などの問題を今後検討する。
（後日、理事間の話し合いにより、2005 年度から国立情報学研究所の電子図書館に AJAMES を掲載することを決定した。）

0. 国際交流事業

- ・ 三浦理事より報告があり、アジア中東学会連合（AFMA）理事会の合意事項が承認された。（20 ページに関連記事）
- ・ 小杉会長より、2006 年度の JAMES 年次大会を AFMA 大会と合同で開催する提案があり、協議の結果、2006 年度 JAMES 年次大会実行委員会に AFMA 大会を兼任させるのは負担が大きいため、次期理事会に AFMA 担当者を置くよう申し送ることとした。
- ・ 2006 年度 WOCMES 第 2 回大会（アンマン）への取り組みについて三浦理事より報告があった。今後、WOCMES 内での JAMES のプレゼンスや資金問題を考慮し、AFMA には積極的に参加、WOCMES への関与は縮小していく方向で

検討する。

3. 渉外

- ・ 大塚理事より、2004年10月11日開催の地域研究学会連絡協議会について報告があった。
- ・ 大塚理事より、新学術会議への対応について報告があった。本学会から情報提供を行う会員候補者の選出方法などについて協議した。
- ・ 林理事より、東洋学(アジア研究)連絡協議会への参加について報告があった。協議の結果、今後、本学会としては地域研究学会連絡協議会に力を入れ、東洋学(アジア研究)連絡協議会には参加しないことを決定した。

4. 企画

- ・ 2005年度公開講演会について、「中東と日本」というテーマに決定し、文化交流をとりあげることとした。日程は2005年11月5日(土)、会場については引き続き一橋記念講堂を利用、科研を増額申請することとした。
(後日、理事間の話し合いにより明治大学リパティホールを会場として申請することとなった。)

5. 第21回年次大会 (32ページに関連記事)

- ・ 臼杵理事より進捗状況について報告があった。
- ・ 海外から研究者を招聘する場合について、今回の実行委員会としては費用負担はできないことが確認された。
- ・ アラビア語についてはセッションを組み、トルコ語やペルシア語の発表も受け付けることとした。

6. 役員選挙 (1ページに関連記事)

- ・ 選挙管理委員として、菊池忠純会員(選挙管理委員長)、江川ひかり監事、小田淑子会員、中村覚会員の4名を指名した。了承されなかった場合の人選は事務局に一任する。
- ・ 事務局の交代があることも考慮し、選挙日程は前倒して2月末に開票を終え、新旧合同理事会は3月中旬に開催することとした。

7. 日本学会事務センター破産後の処理について (32ページに関連記事)

- ・ 臼杵事務局長より、同センター破産後の経緯と債権額について説明があった。協議の結果、債権額については回収の見込みがなく、訴訟を起こしたとしても利益はないため、今後一切の関わりを持たないことを決定した。
- ・ 同センターに委託していた業務(AJAMESバックナンバーの販売等)の今後については、当面その業務を事務局が行うこととする。
- ・ 電子ジャーナル化との兼ね合いもあるので、将来の販売方法については引き続き理事会で検討する。

8. 会員動向

- ・今年度会費納入済みの退会希望者3名について、退会が承認された。
- ・退会希望者が会費未納である場合、未納者には会費の請求を続け、3年間納入されない場合は退会扱いではなく除名処分とすることを決定した。

9. その他

- ・次期の事務局体制について協議した。

第8回日本中東学会公開講演会報告 「中東における紛争と平和構築」

10月30日、東京都千代田区の一橋記念講堂にて、恒例の日本中東学会公開講演会が開催された。今回の講演会ではイラク情勢、パレスチナ情勢、アメリカの中東政策をテーマに、三人の講師の方々にご講演いただいたが、講演会直前に起きたイラクでの香田証生さん誘拐事件やパレスチナにおけるアラファト議長の病状悪化とパリへの移送、また翌週に迫ったアメリカ大統領選挙を睨みつつ、講師の方々には極めてホットな内容を語っていただいた。

当日のプログラムと各講演の要旨は以下のとおり。

<プログラム>

日時：2004年10月30日(土) 13:20-16:50

会場：一橋記念講堂(学術総合センタービル内)

講演者：酒井啓子(日本貿易振興会アジア経済研究所参事)

「戦後イラクの紛争と政治構造」

立山良司(防衛大学校教授)

「パレスチナ問題の現状と国際社会の役割」

高橋和夫(放送大学助教授)

「アメリカの中東政策：その歴史的展開」

司会：飯塚正人(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授)

<講演要旨>

1. 「戦後イラクの紛争と政治構造」(講師：酒井啓子氏)

メディアによるイラク報道には大きな問題がある。今回誘拐された香田証生さんにしても、イスラエル経由でイラクに入国するという無頓着極まりない行動が「イスラエルのスパイ」疑惑を呼び、命取りになった可能性が高いと思うが、メディアはこの点をまったく問題にしていない。また、存在も定かでないザルカーウィーという人間に関心を集中する形で連日報道がなされているが、これこそ「木を見て森を見ず」ではあるまいか？イラク各地で同時多発的に起きている攻撃が「外国人部隊のテロ」で済むはずがないのである。

イラク人の死者はすでに 10 万人を越えている。一方で、復興資金の 4 分の 3 は警備会社と保険会社への支払いに費やされており、未払いの資金も多い。言うならば、戦後のイラクは秩序・中枢・行政サービスなしで放置されてきたのである。こうしたなか、人々は自発的に地方自治への取り組みを始めたが、ファッルージャや、サドル派が社会システム（治安維持・司法システムなど）を確立したナジャフはその代表的な事例であったと言えるだろう。

結果として、2004 年 4 月以降、ナジャフ、ファッルージャの自発的自治と米軍が対峙する形で、戦後最も深刻な国内紛争が勃発した。4 月のファッルージャ包囲は米軍がこの地を地元勢力（ファッルージャ部隊）の治安維持に任せることで妥協が成立し、事態は好転するかに見えたが、6 月末以降、この部隊のために居場所をなくした外国人部隊（ザルカーウィーの名を冠している）が各地で活発な武装闘争を展開すると、米軍はファッルージャに「国際テロ組織」が潜伏しているのではないかと、との疑念に駆られ、地元部隊を解散。ファッルージャ掃討に踏み切った。こうなると、ファッルージャ側も再び外国人義勇兵に頼らざるを得ず、完全な悪循環に陥っている。宗教指導者たちも「米軍の敵」として次々に逮捕されており、米軍の攻撃・攻勢がすべてを無にしてしまった観がある。

このままでは来年 1 月の選挙もイラク中部では実施できないことが懸念されるが、中部だけを除外して選挙を行えば中部イラク人が疎外感に苛まれようし、かと言って、全土で選挙が中止されるような事態となれば正統性のない暫定政権が続くことになり、もっと悪い結果しかもたらさない。

2. 「パレスチナ問題の現状と国際社会の役割」(講師：立山良司氏)

現在、中東和平プロセスは完全に行き詰まっており、過去 4 年間のパレスチナ人、イスラエル人の犠牲者はそれぞれ約 2,900 人、900 人にのぼっている。飛び地状の自治区や経済悪化のためにパレスチナ側が絶望感を深め、過激化していく一方、イスラエル国民のテロに対する恐怖、「テロとの戦い」の正当性がイスラエル軍の軍事作戦をエスカレートさせている。双方の和平反対派や政治指導者のリーダーシップ欠如、またアラファト議長を相手にしないイスラエルの姿勢に象徴される相互不信の結果、2001 年 1 月を最後に完全停止した和平交渉が再開される見通しはまったく立っていない。2003 年 4 月に正式提示されたロードマップ構想は、2005 年までにパレスチナ国家を樹立するなど、オスロ合意で明示されなかったゴールを決めるところから始めようとした試みであったが、これもまた完全に行き詰まった。

こうしたなかで、シャロン首相が 2004 年 4 月初め頃から一方的撤退構想(2005 年末までにガザから全面撤退、西岸北部の 4 入植地も撤退)を提唱しているが、この背景には「現状維持は不可能」と見る首相の判断があるだろう。現状のまま推移すれば、2010 年代前半には、イスラエルの人口比はアラブ人とユダヤ人が拮

抗し、その後はユダヤ人が少数派に転落することが懸念される。だが人口 130 万人のガザを分離すれば、この人口問題は先送りできるのである。問題は「ガザ・ファースト」か「ガザ・オンリー」「ガザ・ラスト」という点であろうが、10月26日、クネセツは 67 対 45 でこの撤退構想を承認した。とはいえ、反対票のうち 17 票は与党リクードの議員であり、今後の見通しは予断を許さない。一方、パレスチナ側はこの構想を不安と期待を持って眺めており、「勝利」との認識も見られる。国際社会も、ロードマップ構想につながればという期待から、本構想を基本的には支持していると見ていい。

米ブッシュ政権は発足当初からパレスチナ問題を「テロとの戦い」と見なす姿勢を示してきたが、9.11 後はアラファト排除に転換。パレスチナ難民がイスラエル国内に帰還する可能性を排除し、西岸主要入植地のイスラエル領編入を認めるといった政策転換まで行ってきた。結果として、パレスチナ問題は反米主義・反米感情の原動力となっている一方、中東諸国にとっては拡大中東構想で求められた改革を先送りする口実ともなっている。こうした状況下で国際社会がなすべきことは、西岸・ガザに国連軍、PKO、NATO 軍のような国際的プレゼンスを入れていくことであろう。そうでなければ、まともな和平交渉は期待できず、パレスチナ・ゲッターを避けることもできない。

なお、急に現実味を帯びてきたアラファト後の展開について言えば、集団指導体制の中で権力闘争が始まり、そこにイスラエルやハマスが介入して、相当な混乱が生ずることが予想される。和平プロセスもなかなか進まないのではあるまいか。

3. 「アメリカの中東政策：その歴史的展開」(講師：高橋和夫氏)

冷戦期アメリカの中東政策は(1)ソ連の封じ込め、(2)石油供給の確保、(3)イスラエルの安全保障という 3 つの目的を持っていたが、最初の 2 つと 3 つ目の目的はしばしば対立・矛盾した。たとえばソ連がペルシャ湾岸の産油地帯に進出すれば核戦争も辞さないとしたカーター・ドクトリンは、最初の 2 つの目的には適っていたものの、イスラエルへの支援が湾岸産油国の反発を産み、石油供給の確保に悪影響をもたらしかねないというジレンマを解消することはできなかったのである。同様に、イスラエル支援を重視するアメリカがアラブ諸国に武器を供与しなければ、ソ連がこれらの諸国に武器を供与して影響力を強めるというジレンマにもアメリカは直面した。とはいえ、人口 550 万～600 万の少数派でありながら、大統領選挙で重要な州に集中的に居住し、平均の 2 倍の投票率を誇るユダヤ系アメリカ人、影響力ある地位を占め多くの政治献金を提供するユダヤ・ロビーにアメリカ政府は一定の配慮をせざるを得なかった。他のアメリカ人が中東に関心を持っていないために、中東政策がユダヤ・ロビーに引きずられるのは冷戦期も今も同じである。

さて冷戦後のアメリカは、3M (military, money, media 軍事力、経済力、言いふらし力) + C (culture, civilization ソフト・パワー) = D (diplomacy 外交的な影響力) という方程式に則って、唯一の超大国となったが、この状況下、中東政策で追求されたのは(1)石油供給の確保と(2)イスラエルの安全保障であった。ところが 2001 年 9 月 11 日以降は、この 2 つの目的より上位に、(1)テロ組織の壊滅 (対テロ戦争と中東の民主化) (2)大量破壊兵器の拡散防止が加わり、次いで(3)イスラエルの安全保障と(4)石油供給の確保がこの順で追求されるようになっていく。アメリカ政府の中枢は「9.11 はまだ幸運だった、ハイジャックされた飛行機に大量破壊兵器が搭載されていたら想像を絶する大惨事となっていた」との認識を持っており、テロと大量破壊兵器の結合を阻止すべく、イラク先制攻撃に踏み切ったのである。これをアメリカのイスラエル化と呼ぶこともできよう。

もっとも、アメリカには新たな国内要因も生まれている。一つは 4,200 万～5,400 万人にのぼると言われる、いわゆる「キリスト教原理主義者」で総人口の 14～18% を占める。一方、改宗と移民の結果、現在アメリカには 300 万～800 万人のイスラーム教徒が居住している。彼らは総人口の 1～3% に過ぎないが、パレスチナ問題への関心が高く、長期的に見れば、これまで終始ユダヤ・ロビーに引きずられてきた観のあるアメリカの中東政策に一定の変化をもたらすことになるかもしれない。

* * *

当日はあいにくの雨で、参加者は予想をやや下回ったが、講演後の質疑応答では、3本の講演に直接関係する質問のほか、NGO など国家以外のアクターが国外で何かしてかした場合、国家はどう責任を取るべきかなど、昨今の事件や情勢を反映した質問が寄せられた。さらにメディア報道のわが国世論への影響や、イラクでの日本の復興支援進行状況といった問題も提起され、各講師との間で熱心な議論が交わされた。

参加者にお願いしたアンケートにも「タイムリーな話、ふだん聞くことのできない話、軽快なトーク、それぞれに素晴らしく、わかりやすい話がとても刺激だった」「イラクやパレスチナの問題は日々情報が新しくなり、素人には整理しきれないが、内容を大変わかりやすくまとめてもらった」「米国の対中東政策にしても、9.11 以前と以後でどう変化しているのか、わかっているようで実はよくわかっていなかった。今日は目が覚めた」「講師陣の洞察力の深さ、幅広さに感銘を受けた」「時宜にかなったテーマで、このように冷静な切り口を提供してもらえる場はありがたい」「香田さんやアラファト議長の問題について一般市民には奥が見えないので、今日の講義は役に立った」「今後イラクやパレスチナの平和に日本人がどのように貢献できるか考えていきたい」「今後は平和構築のために日本政府が採るべ

き方策を拝聴したい」などのコメントが多数寄せられ、おおむね好評だったと言える。もっとも、中には「平和構築あるいは問題解決型の内容に乏しかった。そのこと自体がこの問題の難しさを物語っているのかもしれませんが」といったコメントも見られ、司会者としてはこの点を深く反省している。

なお、本年度の講演会ポスターも例年同様、工藤強勝さん（デザイン実験室）にデザインをお願いしたが、立山講師の発案を受けて講演会担当が題材に選んだ UNRWA のウェブサイト掲載写真を、講演会タイトルなどの文字に取り込んだ斬新なデザインのポスターは、会場の内外ですこぶる好評であったことを付け加えておく。
(企画担当 飯塚 正人)

アジア中東学会連合 (AFMA) 第 5 回プサン大会報告

2004 年 10 月 15-17 日に AFMA 第 5 回大会がプサン外国語大学（韓国）において開催された。2003-04 年度に AFMA の会長・事務局を担当する韓国中東学会（KAMES）の主催によるもので、KAMES が毎年開催している国際シンポジウムを兼ね「中東、アジア、イスラーム」を共通テーマとし、8 つのパネルとその前後に全体会議が配置されるという盛りだくさんの構成であった。

開会式では、KAMES および AFMA の現会長である CHEON Wan Kyung 氏から開会の辞、プサン市長など来賓の挨拶のあと、KAMES の初代会長であった RHEW Joung Yole 韓国外国語大学教授から「理解にもとづく平和」と題する基調講演があり、地域研究による相互理解の必要、とりわけ「中東研究者は中東地域の健全な理解を推進する責務を負っており、研究だけではなく研究成果を全世界にむけて発信させなければならない」と結んだ。

つづいて午前 10 時から、計 8 つのパネル（中東の政治・経済、アジアにおけるイスラーム、アジアにおけるアラブ文学、中東の政治、イスラームの社会と文化、中東における経済、イスラームと歴史、イスラーム）が並行して開催された。各パネルでは 4-5 名ずつの発表者（計 33 名）と 6-7 名のディスカッサント（多くは韓国人研究者）が配置されていた。発表者は、韓国はもとより、中国、日本、モンゴル、インドネシア、中東、デンマークなど多種多彩で、韓国や日本で研究する中東出身の研究者や留学生も多く、中東研究の東アジアへの広がり、国では到底区分できない多面的な「国際」交流の雰囲気がつくられていた。各パネルには常時 30-40 名程度の参加者がいて、熱のはいった発表・質疑が行われたが、それらの内容については、パネルごとの報告をお読みいただきたい。

6 時半にはすべてのパネルが終了し、総括討論と閉会式が講堂で開催された。

各パネルの議長にはパネルの内容について短い報告が求められた。ひとつひとつの発表を要約する議長もあれば、発表タイトルだけ紹介して自分のコメントを述べる議長もいて、それぞれの個性があらわれていたが、いずれのパネルも「成功」であったと結ばれた。

日本中東学会では、今回の AFMA 大会について、中東・イスラームをめぐる policy, media, education の 3 つの関係を、具体的な事例を提示しながら検討し、中東や東アジアのムスリム諸国からの研究者をまじえ多角的に討議を行うことを基本方針とし、15名の派遣を行った(2名の中東からの研究者招聘を含む)。イラク戦争をめぐる日本と中東の外交政策(大野)、日本の韓国統治と中東(Penn、Chehidi)、日本のムスリム社会(桜井、小島)、パレスチナ問題と東アジア(Tamimi)、学校教育における中東・イスラーム認識(三浦)といった報告では、韓国や中国と共通する観点からのコメントが寄せられた。スーフイズムの定義をめぐる発表(東長)では、中国やインドネシアのスーフイズムを念頭においての異同が質問され、スーフイズムというテーマの広域性・普遍性を目の当たりにする思いがした。さいごの総括討論では、いくつかのテーマについて共同研究プロジェクトの必要が具体的に提起された。2回の晩餐会や大学食堂での昼食時間には、あちこちに国境をこえた歓談の花が咲き、名刺や論文が交換されていた。日本中東学会からの派遣にあたっては、国際交流基金中東知的交流セミナー助成プログラムから「アジアにおけるイスラーム：中東と東アジアの多元的対話」という事業名で助成をいただいた。文字通り「多元的対話」の種を各所に播くことができたといえるだろう。同基金の助成に記して謝意を表したい。

主催の KAMES では、韓国の学術振興財団、外務省、プサン市、プサン外国語大学、ムスリム連盟などの資金助成をえるなど、大会の成功のため多大な尽力をされた。参加者には、300頁の立派な大会プロシーディングスと『韓国中東学会年報』が配られた。とはいっても、準備は万全とはいえず、よくぞ間に合ったというのが実感でもあるが、やきもきした分だけ一緒に大会をつくったという気持ちにもなる。大会事務局長の YOUN Yong Su 助教授は、30代ともみえる若さで、それでいて慌てず騒がず事務を切り盛りしていた。韓国人の発表者やコメントーターのなかには、英語もアラビア語も闊達な大学院生や研究助手がいて、新しい息吹を感じた。

大会中に開催された AFMA 理事会において、モンゴル中東学会の正式加盟と 2005-06 年の会長・事務局を日本中東学会が担当することが決定された(詳しくは 20 ページの AFMA 理事会報告参照)。次期大会は 2006 年に日本で開催されることになる。東アジアの中東研究の発展と中東研究を通じた多元的対話にむけて、会員からのアイデアとご協力をまっている。(国際交流委員会 三浦 徹)

パネル報告

【パネル1：中東の政治と経済】

臼杵 陽（国立民族学博物館・地域研究企画交流センター）

大野元裕（中東調査会）報告は冷戦体制終焉から 9.11 事件、そしてイラク戦争とその後までの時期を視野に入れて東アジア諸国（日本、韓国、そして中国）とアメリカとの関係を中心に簡潔にまとめたものであった。とりわけ、対米関係の中で日本と韓国の対応の差異に焦点が当てられたためか、フロアーから数多くの質問や意見が出された。

T. シェヒーディー（チュニジア教育省）報告はチュニジアのタハール・アル・ハッタード（1899-1935）と日本の吉野作造（1878-1933）の改革的な政治思想を植民地主義への批判の観点から比較考察した野心的な試みであったが、同じ植民地とはいえチュニジアと朝鮮半島を同一の俎上に載せて議論することへの厳しい批判がコメントとして出された。

D. ユング（デンマーク国際研究所）報告は、宗教と政治の関係をめぐってイスラーム主義者が主張する「政教一致」のホーリスティックな言説がシャリーア施行に伴う政治化および実定法化の要求につながってしまい、逆に信仰・イデオロギー体系としてのシャリーアを損ねてしまうというポレミカルな問題提起を行って活発な議論を呼び起こした。

PARK Chan Ki 報告（韓国大学）は GCC 産油国における労働市場の外国人労働者問題を各国ごとに取り上げて、1980 年代終わり以降の原油価格下落は労働力の自国民化政策の推進を余儀なくされた現実を踏まえて、自国民化政策は教育水準を高めるなどの積極的な施策が行われないかぎり実現は難しいと指摘した。

なお、ZHANG Xiaodong（中国社会科学院西亜非洲研究所）報告は報告者の欠席のためにキャンセルされた。

【パネル2：アジアにおけるイスラーム1】

小杉 泰（京都大学）

パネル2は、5本の報告のうち4本が日本からの派遣メンバーが占めることになったが、出身国という観点から見れば、日本2名、米国1名、パレスチナ1名、さらにインドネシア1名（韓国側からの報告者）という構成で、「中東・アジア・イスラーム」という大会全体のタイトルにふさわしい陣容となった。内容的にも、歴史的な報告と現代的な報告がうまく組み合わせられたものとなった。

松本ますみ（敬和学園大学）報告は、20世紀前半の中国におけるムスリムに対するキリスト教の福音主義的な宣教活動の実態を示し、またイスラーム復興期のムスリム側が自己のアイデンティティを保ったことを報告した。宗教的論争にも

かわらず、両者の宗教的共存が保たれていたことは特筆に値する。

ユニタ・ウィナルト（インドネシア大学）報告は、スハルト体制以降のインドネシアにおいて、いかに多元的民主主義が構築されるか、されるべきかについて論じた。民族的・宗教的多様性の現実と共存の課題をどのように両立させるかは、他の地域でも緊要の課題となっているが、特に長年権威主義的な体制が続いたインドネシアの例について、ヴィヴィッドな問題意識が提示された。

桜井啓子（早稲田大学）報告は、現代日本におけるムスリムについて、とりわけ南アジア出身の在住者たちを中心に、人口的な推移や社会的実態などを詳しく論じた。実際に人的な接触がある地域ではゆるやかに共存がなされているという報告に対して、韓国側の研究者から、韓国ではバングラデシュ出身者を中心とするムスリム在住者に対して深刻な偏見が生じているという指摘があり、両国の比較が興味深い課題として浮かび上がった。

アッザーム・タミーミー（マークフィールド高等大学院）報告は、パレスチナ問題の現況を的確に報告するとともに、あるべき解決に向けて東アジア諸国が果たすべき役割が大きいことを強調し、参加者に強い印象を与えた。きわめて今日的な問題であることもあって、質問が相次ぎ、パレスチナ問題に対する関心の高さが示された。

最後のマイケル・ペン（北九州大学）は、明治期の日本で、エジプトのイメージが日本にとっての「近代化の先例」から、イギリス植民地化を経て、日本にとっての「韓国」の先例とみなされるようになった経緯を紹介し、日本と中東の深い歴史的関係を明らかにした。参加者からは、きわめて実証論的な質問が寄せられ、深みのある議論がおこなわれた。

【パネル3：アジアにおけるアラブ文学】

東長 靖（京都大学）

パネル3は、当初4本の発表が予定されていたが、HUANG Minking（西北大学、中国）”Chinese Cultural Affects to Islam”が発表者の都合によりキャンセルされた結果、日本人3名がパネルを独占することとなった。

岡真理（京都大学）報告は、中東の危機的状況に関する報道が文学を取り上げないことに注意を喚起したうえで、氷山の一角ともいえる事件だけをジャーナリストティックに取り上げることよりもむしろ、そこに至る日々の営みを描く文学作品を通すことでより深い理解が得られるはずだと説く。小説に主として論をしぼった岡報告に対しては、より短い詩などに注目する必要はないか、また政治的なメッセージを強調するあまり、芸術性が犠牲になることはないか、といった質問が寄せられ、談論風発となった。

つづく岡本久美子（大阪外国語大学）報告は、千夜一夜物語のなかのハサン・

バスリーの物語をとりあげ、その起源が七夕をめぐる中国の説話にあるという仮説を提出した。司会者のチェ・チャンモ教授が指摘したとおり、本発表はこのセッションのタイトルにふさわしく、AFMA ならではの意欲的なテーマを扱ったものといえよう。質疑応答では、起源を実証するためには、内容の類似だけでなく、説話の成立年代や宗教・文化的文脈などにより留意すべきだといった意見が寄せられた。興味深いテーマであるだけに、さらに考究が深められることを期待したい。

臼杵陽（地域研究企画交流センター）報告は、パレスチナ・イスラエル紛争に関してはあたかも日本人の手は汚れていないかのような論があるなかで、日本人がどのようにパレスチナを描いてきたかを歴史的に丹念に跡付けたうえで、現在のパレスチナ問題に関するイメージは、第二次世界大戦後に作られたものにすぎない、と結論づけた。宗教的側面と政治的側面との混同が見られ、日本人は宗教的にのみこの問題を理解しているのではないかという質問に対しては、まさに政治家自身が宗教的言辞を弄するのだという返答がなされた。

コメンテーターの質問・コメントはもっぱら岡報告と岡本報告に集中したが、それはこのセッションが文学を中心としたものだったからであろう。臼杵報告は、政治を扱ったセッションに場を与えられれば、より活発な議論を巻き起こしたであろうと思われる。

【パネル4：中東の政治】

Tarek CHEHIDI (The Ministry of Education and Training, Tunisia)

In a time when the impact of events taking place in the Middle East on Asia and other parts of the globe doesn't cease to grow, this International symposium came to form a setting where intellectuals and academics from Asia and the region in question could share the outcome of their research and also their viewpoints and impressions on Middle Eastern societies. In addition, the symposium witnessed the creation the Mongolian Association of Middle East Studies, boosting, therefore, the study of the region and hopefully paving the way for a diversified apprehension of its different elements.

The 13th KAMES & the 5th AFMA International Symposium included 4 sessions and 8 panels that dealt with matters of both historical significance and current importance. Panel 4 was planned to include 4 presentations yet panel ended up with 2 absentees. Indeed, YANG Gang “Chinese Policy to the Islamic Fundamentalism” and Walid KHAZZIHA “The Political Fortunes of Islamic Militancy in the Contemporary Middle East” were not able to attend the symposium. Dr. KUM Sang Moon (Hankuk Univ. of Foreign Studies) made a presentation titled “A study of the Identities of Emirates” during

which he portrayed the societal organization as traditional. He argued that tribal organization dominated the social and political spheres of the Emirates. Dr. YANG Fuchang (CAMES) carried out the second presentation, “Chinese Foreign Policy to the Middle East.” He gave a brief historical background of the relations between China and the Middle East and went on to explain the reasons of China’s interest in the region. Dr. YANG, also, referred to China’s economic development and its increasing dependence on oil from the region.

【パネル5：イスラ - ムの社会と文化】

松本 ますみ(敬和学園大学)

EUM Ik Ran (明知大学) は現代カイロを多様な価値が混在するカクテル・シティと規定する。その上で、IT 技術の進展と普及によって、従来のいとこ婚、見合い婚から、インターネット・チャットや携帯電話などを使った配偶者選びが増加していると報告した。それに対して、それは全世界的な傾向ではないか、という意見がだされた。また、カクテル・シティという概念規定は興味深いという意見もでた。

小島宏(国立社会保障・人口問題研究所) 報告では、日本の外国人ムスリム人口が約 75,000 人、そのうち男性ムスリムがかなりの割合で日本人女性を配偶者としていることが指摘された。その上で、日本政府はムスリム移民とムスリム社会を日本社会に定着させるような努力を払わなければならないと結んだ。議論では、なぜムスリム男性が日本人女性に好かれるのか、さらにはムスリムとの国際結婚カップルの出生率はどうかという質問がなされた。

三浦徹(お茶の水女子大学) 報告は、アンケート調査をもとに日本の高校生がイスラームに対して、否定的なイメージを強く持っていることの原因として、学界の常識とメディアの送り手との知識の乖離、教育現場の教師の情報源の限界、そしてイスラーム文明の先進性を強調するほどかえって現代イスラーム世界が混乱・衰退として捉えられるというジレンマを挙げた。発表後、韓国も同じような問題を抱えているが、最近の試みのように、高校で第二外国語としてアラビア語を教えるのは効果的ではないか、という意見がでた。イスラーム認識を高めるといふ意味においては、韓国が日本よりも先進的な試みをしていることが確認された。

YIN Gang(中国社会科学院西亜洲研究所)は、伝統的中国イスラームにおいて、クルアーンの翻訳はほとんどなされなかったこと、したがって、今日的な意味におけるジハードは中国イスラームにおいては存在し得なかったとした。それに対して、ジャフリーヤ派はもとよりそれを使い、抗日戦争時にも、ジハード概念はずでに使われていたのではないか、という疑問が呈された。

全体として、三浦の提示した問題が特に韓国側の大きな関心と共感を呼び、あらたな議論の境地を開いたという印象を受けた。

【パネル6：中東における経済】 小島 宏（国立社会保障・人口問題研究所）

第6パネル「中東における経済」は4報告で構成され、日本中東学会大会でもおなじみのAFMA・KAMES前会長のSHIM Ui Sup（明知大学）による第1報告は、第2次大戦後における国際金融センターとしてのバイルートの勃興・凋落とレバノン内戦以降におけるオフショア金融センターとしてのバーレーンとドバイの勃興をとその背景を中心としたものであった。

モンゴル中東学会会長のSukhragchaа NYAMZAGD（モンゴル通商経営研究所）による第2報告は中東欧、旧ソ連、北東アジアの転換経済圏26カ国における経済改革に関するもので、その効果を比較検討し、モンゴルにとっての政策的含意を得ようとする試みであった。

Abdallah HASSOUNA（韓国海洋大学）教授によるパレスチナにおけるガザ港新設の経済的重要性に関する第3報告は、パレスチナが輸出入をイスラエルの港湾に依存していることから特にコスト・雇用面で経済的な自立・発展が困難になっているため、1995年・1999年の2国間協定にも盛り込まれた港湾新設が戦略的重要性をもつとするものであった。

HONG Seong Min（韓国外国語大学）による中東における稀少財としての水資源を巡る紛争・管理に関する第4報告は、既存の国際紛争と潜在的紛争に焦点を合わせ、2国間平和協定を含む国際法・国際協定に基づく水資源管理による紛争解決・予防を模索するものであった。

大物の座長・報告者が揃い、各報告はそれなりに充実していたが、テーマが分散していたためか、参加者の集まりが悪く、遅れて始まり、早く終わるというやや寂しいパネルであった。運営委員会参加・座長代行・代読といった事情があったにしても、4人の予定討論者のうちKIM Joong Kwan（明知大学）しか来なかったが、同教授は4人分奮闘していた。

【パネル7：イスラ - ムと歴史】 岡本 久美子（大阪外国語大学）

本パネルは、韓国大学 PARK 教授の司会のもとに、4名が研究報告をおこなった。

佐藤次高（早稲田大学）報告「イスラーム地域研究・その業績と将来的展望」は、1997年4月から2002年3月まで、日本の文部科学省のもとでなされた中東・北アフリカ・中央アジアをめぐるイスラーム地域研究にかんして報告した。具体

的に研究組織から方法、そして様々なアプローチによるシンポジウムや研究会とその結果発行された多くの研究報告書を提示していった。

報告後の質疑応答では、韓国人研究者から、この地域研究について、日本の文部科学省からはどのくらいの予算をとったのかというブラクティカルな質問もでて、なごやかな苦笑のうちに報告は終わった。

次に、Azamat Anvarovich AKBAROV (プサン外国語大学)「イスラームとバイオレンスの問題」が報告されたが、メディアによるイスラームの過激な報道による誤解、イスラームとはそもそも平安を求める宗教であることなどを、コーランやイマームの言葉を引用して繰り返し、イスラームは過激な宗教でも、過激さやテロリズムを認める宗教ではないことを強調した。さまざまな地域における事例をもふんだんにもりこんだ報告で、時間の足りないことが残念に思われたが、要するに、イスラームの平和希求性教義に集約できる熱のこもった報告であった。

次は本大会初参加のモンゴルの研究者 Purev LKHAGVASUREN(国立教育基金)によるもので、モンゴルにおけるトルコ起源をもつ人々の歴史的研究という報告であった。カザフ、ホトンなど、多くのトルコ起源のモンゴル人のエスニック・グループを紹介した。どのグループがどこの地域に多いかなどの詳細な説明が行われたが、モンゴルの地理に疎い私を含めた聴衆は、民族名と地名の違いを把握していくのに追われた。この大会からモンゴル中東学会が参加し、AFMAの規模もより大きくなる。今回、モンゴルからは2名の参加であったが、モンゴル民族衣装の披露など、パネルの場以外でも一同を楽しませてくれた。また、我々もイスラーム地域として、いままでモンゴルに対する、今回発表されたホトンなどのグループについてくわしく目をむけていなかったことにあらためて気づき、新たなモンゴル中東学会の参加に今後の期待をおおきく寄せるところである。

最後は、SONG Kyung Keun (Chosun Univ.)「ナポレオンのエジプト遠征とそれに対するエジプト人社会の変容」であった。ナポレオンのエジプト遠征は、いうまでもなくヨーロッパと中東の衝突である。エジプトに乗り込んできたナポレオンのフランス軍に抵抗するエジプト人たちと、フランス統治のもと、エジプト人社会がうけた影響についての報告がなされた。フランス統治により、エジプト人社会に変容がおこり、たとえば教育など近代化の影響を受けたとまとめられた。

【パネル8：イスラーム】

岡 真理 (京都大学)

東長靖 (京都大学) 報告は、「スーフイズム」概念の定義をめぐり、同概念が一般に「イスラーム神秘主義」と説明されることについて、「神秘主義」とは何か、「イスラーム的」とはいかなることか、という観点からその妥当性を検討したのち、「倫理」「神秘主義」「民衆信仰」という「スーフイズムの三極構造」という観

点から考えることを提唱した。図解入りで分かりやすく、洒脱な英語で聴衆の笑いを誘う見事な報告だった。

続くレバノン大学の Khalil Ahmad KHALID 報告（アラビア語）は、レジюмеに沿って、文章を少しずつ読んではそれについてコメントを展開していくという、大学の講義スタイル。諧謔を交えた話は漫談として聴くには面白かったが、当日、配布のレジюмеを事前に読む時間のなかった大半の聴衆（私もその一人である）にとっては、報告要旨は分からなかった。限られた時間のなかで論点を明確に提示し、レクチャーとしても見事に完結していた第2パネルのタミーミー報告や後述のサドリア報告に比べると、我が道を行くハリール報告は、聴衆不在の独善的印象を免れなかった。

最後の M. サドリア（中央大学）報告は、2003 年秋に逝去したエドワード・サイドの著作活動を、著者がその叙述に関して立脚する自己のアイデンティティのあり方という観点から論じ、その弁証法的発展に、インターネットが深く関わっていることを示した興味深い報告だった。西洋人の立場から西洋を自己批判した「オリエンタリズム」のサイド、アラブ人の立場からアラブ人に向けて批判的議論を展開した『アハラーム・ウィークリー』のサイド、この対立するアイデンティティが、『アハラーム・ウィークリー』のコラムがインターネットで配信され、世界中の読者に幾多の言語で読まれるという新たな事態を経由することによって止揚され、普遍的な「ペンの人」として著作を行うことを可能にしたと論じた。ハリール報告同様、レクチャー・スタイルの報告だったが、論点も明確で、単にサイドについて論じるだけでなく、サイドを論じることでパフォーマンスに現代世界に対する批評的介入を試みる魅力的な報告だった。

私自身はサドリア報告が聴きたくて第8パネルに参加したが、平行するパネルが「イスラームの社会と文化」「イスラームと歴史」であったのに対し、これらの範疇に収まらない3報告が第8パネル「イスラーム」にまとめられたため、パネルとしてのまとめや報告相互の内的関連性に欠けていたのが残念だった。

大会参加記

【The 5th AFMA International Symposium in Pusan】

Michael PENN (Kitakyushu University)

The JAMES delegation arrived in Pusan in the afternoon and evening of Friday, October 15, with a mixture of unease and expectation. Nobody was quite sure what to expect. Would the conference run smoothly? Were we heading for chaos? Our fate for a weekend seemed to balance on a razor's edge. That first evening we dined near our hotel at Haeundae beach with an air of mystery and many of our crucial questions unanswered.

When the main conference opened on Saturday morning, however, we soon discovered that our Korean hosts had worked hard to provide a stimulating atmosphere for our presentations and deliberations. The Pusan University of Foreign Studies campus is situated on a high hill overlooking much of the city, and the weather was clear and beautiful for the duration of our stay. Inside the building, where most of our attentions were focused, the atmosphere was, if anything, even finer. Scholars from institutions in Korea, Japan, China, Mongolia, Tunisia, Denmark, Egypt, Indonesia, Britain, and Lebanon were all mixing together, enjoying private conversations, and exchanging ideas and experiences from a variety of perspectives. Despite the diversity of our origins, the conference was remarkably friendly and even intimate. Perhaps we were all drawn together by our common love of Middle Eastern Studies, which erased for a weekend all the usual boundaries of nationality, politics, and language.

The Saturday conference was quite long—almost ten hours straight—but in that time we heard many stimulating papers and engaged in numerous friendly debates. E-mail addresses and contact information were exchanged enthusiastically. Sometimes a scholar from Japan discovered that they had a common research interest with a Korean or Chinese scholar. It thus seems likely that new proposals for joint international research may appear in the future. Everyone gained something from this pleasant event.

In the evening, we were treated to an excellent banquet at a fine hotel with more food, drink, and fine fellowship than could easily be digested. The variety on our plates competed only with the variety of our discussions and thoughts. When at last our two-hour meal was done, we strolled back together toward our beach hotel.

On Sunday morning we awoke, and each member found their own path through the port city of Pusan, and then back to our homes in Japan. Our only regret was that our magical moment was only too brief, and that we must so soon return to the familiar routines of our daily lives.

The memories of the 5th AFMA International Symposium live on, however, and may yet produce new and wonderful outcomes in the future. As members of JAMES, it is clear that we must meet a high standard of warmth and hospitality for the next AFMA meeting here in Japan if we are to match the efforts of our fine Korean hosts this time around in the fine city of Pusan.

【AFMA 第 5 回大会に参加して】

桜井 啓子（早稲田大学）

会場となったプサン外国大学の校舎は、小高い丘の上にたつモダンな建物で、最新設備を備えた教室は、多様化するプレゼンテーションのスタイルに柔軟に対

応できる快適なものだった。学会開催期間は3日間となっていたものの、研究発表は、すべて16日に行われたために、2パネルないし3パネルの同時開催となり、一日に研究発表とディスカサントなどの二役が割り当てられた人も少なくなかったようだ。

会場と宿舎のホテルが遠かったことや休憩室がなかった(?)こともあり、ほとんどの参加者が、朝から夕方までいずれかのパネルに参加したためか、どのパネルも盛況であったように思う。またパネルごとに発表者の数を超えるディスカサントが指名されていたために、発表後のコメントや質疑応答がかなり活発に行われた。英語が共通語であったために議論が十分に深まらなかったのではと思うこともあったが、英語ゆえに率直な意見交換が可能だったのではないかと思われる場面もあった。

国際学会の魅力は、何といっても様々な国の人達との情報交換にある。ソウル周辺で働くイスラーム圏出身の労働者と韓国人女性との結婚が増えるなど、韓国におけるムスリムの増加が、新しい研究テーマになりつつあると聞き、日本との類似や相違が気になった。ちなみに、中国でも最近アラブ人男性と中国人女性との結婚が増えているそうだ。中東問題とは直接に関係ないが、モンゴルの女性研究者によると、モンゴルの大学では女性教員の数が多く、発言力も強いのだそうだ。モンゴルでAFMAが開催される暁には確かめにきてね!とお誘いを受けた。

【第5回ブサン大会に参加して】

大野 元裕(中東調査会)

2004年10月15日から17日にかけて、ブサンで開催された標記大会に参加した。私にとっては初めてのAFMA大会でもあり、数多くの刺激的な経験を得られたというのが率直な感想であった。韓国、中国、モンゴルおよび日本の中東学会にそれぞれ関係を有し、類似の知的関心を共有する研究者が一同に会し、広く問題意識を問いかけ、成果を披露する中で、異なる経験と知識に基づく知的対話が行われた。このことは、研究の質および更なる知的意欲を高めるにとどまらず、特殊な世界の中ではあるが相互の理解を深め、今後の協力の基盤をいっそう拡大したものと実感を得た。これらの輪は、研究教育職につくもののみならず、韓国の中東に関心を抱く学生をも巻き込み、学会らしさを呈していた。

日本側の出席者は、歴史、文学、政治、宗教、文化、社会と多岐にわたる分野を専攻される専門家により構成されていたが、韓国については文学・言語系の研究者が多く、また中国については「官」との関係が強い政治専攻の専門家に偏っていた。それぞれの国の関心の所在を示しているようで、興味深かった。

他方で、残念であったのは、タイトな日程であった。それぞれの発表については時間的制限が課されたために、議論が深まる以前に時程が優先されて、若干消

化不良気味になったきらいもあった。また、午前中と午後の3つのセッションが、それぞれ3会場で開催されたが、私の場合には、ひとつのセッションで発表を行い、別のセッションでディスカッサントに指名された。このため、会場の選択に実質的な制限が加えられた。多忙な出席者による効率的な発表の機会を設けるといふ仕方のない理由は存在するものの、貴重な機会であればこそ、贅沢な悩みも出ざるを得ない。

* * *

AFMA 理事会報告

日時：2004年10月16日(土) 21時～22時半

場所：プサン・グランドホテル会議室

出席者：<KAMES> CHEON Wan Kyung (President of KAMES & AFMA), HAH Byoung Joo (Secretary General of AFMA), LEE Jong Taek (President-Elect of KAMES), YOUNG Yong Su (Secretary General of KAMES)

<CAMES> ZHANG Xiaodong (Secretary General of CAMES), YING Gang (Deputy Secretary General of CAMES)

<JAMES:> 小杉泰、三浦徹、臼杵陽

SHIM Ui-Sup (Honorary President of AFMA), Sukhragcha NYAMZAGD (President of MAMES)

議題1 モンゴル中東学会 (MAMES) の AFMA 加盟

2003年10月に設立大会を開催。04年理事16名でモンゴルのアカデミーに登録。AFMAには95年の設立大会からオブザーバー(地域学会をもたない会員)として参加。以上の説明ののち、加盟を承認。

議題2 AFMA 大会における招聘者の数

これまでは主催国の事情に応じてまちまちの人数であった。これを固定数にするという提案もあったが、要は資金の問題なので、最低1名は旅費・滞在費を負担する形で招聘する、という合意にとどめる。

議題3 会長・事務局の任期

モンゴルが加盟したため、2年任期とするとローテーションが8年に延びるので、1年交替という案が提示された。しかし、1年交替にすると毎年大会を開催することになる。AFMA大会の開催のために、各国とも資金の調達に苦労している状態からみて、これまで通り2年交替を確認した。

議題4 次期の会長・事務局選出

モンゴルから、2005年度からAFMA会長職を引き受け、AFMA大会を早い時期にモンゴルで開催したいとの申し出があった。しかし、会長職は現在の韓国で2巡目にはいったところであり、ローテーションからいけば、日本、中国の

10:15-12:45 Panel 1: Middle East Politics & Economy

Chair: Ahmed Hassan El-Hag Ali (HUFS)

OHNO Motohiro (The Middle East Institute of Japan)

“Japan and East Asia around the Iraqi War”

Tarek CHEHIDI (The Ministry of Education and Training, Tunisia)

“Colonialism as Perceived by Tahar al-Haddad and Yoshino Sakuzo”

Dietrich JUNG (Danish Institute for International Studies)

PARK Chan Ki (Korea Univ.)

“Foreign Laborers in the GCC States: Their Impact on National Development”

ZHANG Xiaodong (Institute of West Asian & African Studies)

“Economic Relations between China and Arab Oil Countries”

Discussant: Abdallah HASSOUNA (Korea Maritime Univ.), HONG Seong Min (HUFS), LIM Nak Sik (Yonsei Univ.), KIM Joong Kwan (Myungji Univ.), KIM Sun Ho (PUFS), KUM Sang Moon (HUFS), Walid KHAZZIHA (American Univ. in Cairo)

10:10-12:45 Panel 2: Islam in Asia

Chair: KOSUGI Yasushi (Kyoto Univ.)

MATSUMOTO Masumi (Keiwa Univ)

“Christian Mission to Muslims in China and Islamic Awakening”

Yunita WINARTO (Univ. of Indonesia)

“Rebuilding Indonesia: Towards Multi-Cultural Society”

SAKURAI Keiko (Waseda Univ.)

”Muslims in Contemporary Japan”

Azzam al-TAMIMI (The Markfield Institute of Higher Education)

“The Contemporary Situation in the Palestinian Question and the Future Role East Asian Nations can play in Resolving it”

Michael PENN (Kitakhusu Univ.)

”Egyptianizing Korea: The Role of the Egypt analogy in Meiji Japanese Political Thought”

Discussant: CHOI Young Gil (Myongji Univ.), HWANG Eui Gab (HUFS), JANG Geon (HUFS), KIM Su Il (PUFS), KIM Jeong Myung (HUS), YOU Wang Jong (Incheon Univ.), YING Gang (Institute of West Asian & African Studies)

Session II

14:00-16:00 Panel 3: Arab Literature in Asia

Chair: CHOI Chang Mo (Konkuk Univ.)

OKA Mari (Kyoto Univ.)

“Reading Modern Middle Eastern Literature in Japan: in Case of Arabic Novel”

USUKI Akira (The Japan Center for Area Studies)

”Image and Reality of the Palestine/Israel Conflict through Japanese Literature and Media”

OKAMOTO Kumiko (Osaka Univ. of Foreign Studies)

“The Tale of Swan Maiden in the Thousand and One Nights :Its Origin and Spread in the Asia”

HUANG Minking (North-West Univ. of China)

“Chinese Cultural affects to Islam”

Discussant: JANG Se Won (Myongji Univ.), KIM Neung Woo (HUFS), LEE Dong Eun (HUFS), LEE In Seop (HUFS), LEE Jong Wha (Myongji Univ.), Mojtaba SADRIA (Chuo Univ.), SONG Kyung Sook (HUFS)

14:00-16:00 **Panel 4: Middle East Politics**

Chair: HONG Soon Nam (HUFS)

KUM Sang Moon (HUFS)

“A Study on the Identities of Emirates”

YANG Gang (Institute of West Asian & African Studies)

“Chinese policy to the Islamic fundamentalism”

Walid KHAZZIHA (American Univ. in Cairo)

“The Political Fortunes of Islamic Militancy in the Contemporary Middle East”

YANG Fuchang (President of CAMES)

“Chinese Foreign Policy to the Middle East”

Discussant: CHOI Young Chul (Honam Univ.), KOH Yung Keun (PUFS), SUH Jae Mahn (HUFS), Tarek CHEHIDI (The Ministry of Education and Training, Tunisia), YU Dal Seung (HUFS)

14:00-16:00 **Panel 5: Islam Society & Culture**

Chair: Dietrich Jung (Danish Institute for International Studies)

EUM Ik Ran (Myongji Univ.)

“Development of Information Technology and Its Influences on Youth Culture in the Middle East”

KOJIMA Hiroshi (National Institute of Population and Social Security Research)

“Demographic Analysis of Muslims in Japan”

YIN Gang (Institute of West Asian & African Studies)

“The Social role of Chinese Muslim Women”

MIURA Toru (Ochanomizu Univ.)

“Perceptions of Islam and Muslims in Japanese Schools”

Discussant: AN Soo Hyun (Pusan College of Information Technology), JUNG Kyu Young (Chosun Univ.), LEE Hee Su (Hanyang Univ.), MATSUMOTO Masumi (Keiwa Univ.), YI Kyu Cheol (PUFS), YUN Eun Kyeong (HUFS)

Session III

16:10-18:10 Panel 6: Economics in Middle East

Chair: ZHANG Xiaodong (Institute of West Asian & African Studies)

SHIM Ui Sup (Myongji Univ.)

“Offshore Financial Center in the Middle East”

Sukhragchaa NYAMZAGD (Institute of Commerce and Business)

“Economic Reforms in Different Countries and its Lessons”

Abdallah HASSOUNA (Korea Maritime Univ.)

“The Economic Importance of Establishing Port of Gaza in Palestine”

HONG Seong Min (HUFS)

“Water Resources in the Middle East: Conflict and Management”

Discussant: KIM Joong Kwan (Myongji Univ.), LEE Jong Taek (Myongji Univ.), Moemin HASAN (PUFS), Munkhanasan (Institute of Commerce and Business)

16:10-18:10 Panel 7: Islam and History Chair PARK Chan Gi (Korea Univ.)

SATO Tsugitaka (Waseda Univ.)

“Islamic Area Studies: Its Achievements and Future Prospect”

AKBAROV Azamat Anvarovich (PUFS)

“Islam against Violence”

Purev LKHAGVASUREN (Director of State Training Fund, Mongolia)

“The Study of Historical Origin of Turks Nations setting in Mongolia”

SONG Kyung Keun (Chosun Univ.)

“Napoleon's Egyptian Campaigns & its Influence on the Egyptian Society”

Discussant: Ahmed Hassan El-Hag ALI (HUFS), HUANG Minking (North-West University of China), JUNG Sang Yeul (HUFS), KIM Hyu Jung (PUFS), KIM Sun Ho (HUFS), LEE Nan A (HUFS), SAKURAI Keiko (Waseda Univ.)

16:10-18:10 **Panel 8: Islam** Chair: YANG Fuchang (President of CAMES)
TONAGA Yasushi (Kyoto Univ.)

”Perspectives and Scopes of Sufi Studies”

Khalil Ahmad KHALID (Lebanon Univ.)

“Politics and Religious Succession in the Middle East”

Mojtaba SADRIA (Chuo Univ.)

“Post-Orientalism Said and East Asia”

Discussant: Yunita WINARTO (Univ. of Indonesia), HONG Mee Jeong (Kyunghui Univ.), LEE Won Sam (Sunmoon Univ.), Michael PENN (Kitakhusu Univ.), OHNO Motohiro (The Middle East Institute of Japan)

Session IV

18:15-18:40 **Concluding Discussion** Chair: LEE Hee Su (Hanyang Univ.)

Discussant: Ahmed Hassan El-Hag ALI (HUFS), CHOI Chang Mo (Konkuk Univ.), KOSUGI Yasushi (Kyoto Univ.), HONG Soon Nam (HUFS), Dietrich JUNG (Danish Institute for International Studies), ZHANG Xiaodong (Institute of West Asian & African Studies), PARK Chan Ki (Korea Univ.), YANG Fuchang (President of CAMES)

18:40-19:00 **Closing Ceremony** Chair: WOO Duck Chan (PUFS)

19:30 **Farewell Dinner**

*Abbreviation

HUFS: Hankuk University of Foreign Studies; PUFS: Pusan University of Foreign Studies

国際アラビア語方言学会(AIDA)に参加して

石原 忠佳 (創価大学)

1993年パリで発足した国際アラビア語方言学会 (Association Internationale de Dialectologie Arabe) は、アラブ諸国とヨーロッパを交互に、2年ごとに開催地を選択して開催される国際学会である。第1回パリ大会を皮切りに、第2回1995年ケンブリッジ、1998年マルタ、2000年マラケシュ、2002年スペインのカディスを巡った大会は、今回のチュニジア大会で第6回を数え、目下世界30カ国に会員が広がっている。RLM (Rencontres Linguistiques Méditerranéennes) との共催による今回の大会には、欧米からは米国、英国、カナダ、フランス、イタリア、オーストリア、オランダ、スペイン、イタリア、ブルガリア、ルーマニア、スウェーデン、またアラブ諸国からはモロッコ、リビア、ヨルダン、マルタ、そして開催

国チュニジアで、私を含めると 17 カ国からの参加者になる。

私はスペインのサラゴサ大学 F. Corriente 教授や前回のカディス大会で大会委員長を務めたカディス大学 J. Aguade 教授の勧めで、今回の大会で研究発表を行うことになった。この国際会議ではアラビア語方言のバリエーションについて、各国の研究者がフィールドワークを通じた調査に基づいて、その成果を報告することになっている。私は「アル・アンダルスのアラビア語の動詞パラダイムからみた、モロッコアラビア語の形態論的特質」(Some morphological remarks on Moroccan Arabic: with reference to the Spanish Arabic verb measures) というテーマで報告した。

大会は9月19日、大会委員長 Baccouche Taieb 氏の挨拶ではじまり、翌20日の基調講演で氏は従来的一般言語学における方言 (dialect) と、アラビア語におけるその定義との間には若干の相違があることを指摘し、その区別を文語における法規化 (codification) と口語における変種 (variété) の素性に求めるべきであると主張した。またアラビア語における coiné の確立は、イスラームという宗教的要素に大きく左右され、その発展の過程で口語とも文語ともいえない混成語 (Langue hybride) が成立したことに言及した。そしてチュニジアにおける方言学 (dialectologie) の基礎が確立されたのは 19 世紀半ば以来であり、この時期以来、大学研究機関レベルでの研究で、アラビア語の variété についてのフィールドワークに重点が置かれるようになった現状について報告した。その後の研究発表は主題にそって二つの部会にわかれ、最終日の総会も含めて 22 日まで開催された。発表は英語、フランス語、および正則アラビア語で 20 分が持ち時間であったが、10 分間の質疑応答では方言も含めて様々な言語が飛びかっていた。

会場はチュニスのカルタゴ空港から 60 キロほど離れたリゾート地 Hammamet であったため、会場周辺にはヨーロッパ方面からの長期滞在客も多く、大会参加者も一日のスケジュールが終わる午後 6 時以降は、海岸で研究情報の交換をするグループや、連れ添ってメディナを見学する研究者など、各自思い思いの時間を過ごしていた。私はスペイングラナダ大学で教鞭をとっていた頃と同僚 Vicente Angeles 女史や Mohamed Baba 氏と久しぶりに再会して、雑談に花を咲かせた。

最終日の総会では、次回 2005 年の大会開催地をウイーンと決定して大会は終了した。(非公式ではあるが次回の次は、ブルガリアのソフィア大学が候補地にあがっているという。)したがって発表言語にも今回の 3 カ国語にくわえて、新たにドイツ語での発表も組み込まれることになる。

私の参加した分科会での発表は、主に西方アラビア語方言についての報告が中心であった。(研究発表：アルジェリア・アラビア語とモロッコ・アラビア語における形態論的弱変化 (reduction) / モロッコテレビ放送のインタビューにおける標準アラビア語からモロッコ方言へのシフト / 古代モロッコ・アラビア語ラバト方

言 / 北モロッコ「シャシャウエン」のアラビア語の特質 / Tayyib Saddiqi の演劇にみられるモロッコ・アラビア語の特質 / チュニジア国内のアラビア言語地図 (Linguistic Atlas) と細分化方言の等語線 (isograph) / キプロスにおけるアラビア語口語の地域格差 / マルタ方言におけるイントネーションの特質 / チュニジア・アラビア語における数詞の用法 / トリポリ・リビア方言の呼格の使用について / モーリタニアのベルベル語ゼナガ方言とアラビア語の二重言語併用について / スペインのサラゴサで使用されるアラビア語・モロッコ方言の変遷について / チュニジアの言語地図における qaf と gaf の使用境界線。) 並行してもうひとつの分科会では、アラビア語・ヨルダン方言、エジプト・シナイ方言、スーダン方言、シリア方言、ベドウィン方言など東方アラビア語について、さらにはアラビア語方言学全般の問題も報告がなされたので、ここに大会の全プログラムも紹介する。

< プログラム >

20 septembre

Accueil	
Ouverture officielle	
Conférence inaugurale : BACCOUCHE Taieb	
(Atelier A)	(Atelier B)
Président: Catherine MILLER	Président: Hassen Annabi
CAUBET Dominique <i>INALCO – France</i> «Vers des réductions morphologiques, quelques exemples en arabe algérien et marocain»	PRANDI Michele <i>Paris 13 – France</i> «Le dialecte comme langue d'un territoire : la déixis ancrée dans le milieu»
IRAQUI SINACEUR Zakia <i>Université Mohamed V – Maroc</i> «Caractéristiques régionales des proverbes en arabe marocain»	AL WER Enam <i>University of Essex – Cochester – UK</i> «The dedialectalisation of urban Jordanian»
MAHI Zohra <i>Université Hassan II – Maroc</i> «Shifts from Classical Arabic to the Moroccan Arabic dialect in TV interviews»	LENTIN Jérôme <i>INALCO - France</i> «Dialectes, groupes de dialectes, aires dialectales : quelques réflexions sur la pertinence des discriminants utilisés en dialectologie arabe»
MESSAOUDI Leila <i>Kénitra – Maroc</i> «Le parler ancien de Rabat. Faits de morphologie»	NAIM Samia <i>CNRS – LACITO – France</i> «Stratégie coordinative et stratégie comitative: état de la question en arabe

	dialectal (oriental et arabe)»
ISHIHARA Tadayoshi <i>Soka University – Japan</i> «Some Morphological Remarks on Moroccan Arabic : with reference to the Spanish Arabic verb measures»	OULD MOHAMED BABA <i>Ahmed-Salem Université Complutense – Madrid – Espagne</i> «Les euphémismes dans les dialectes arabes : le cas du hassaniyyä»
(Atelier A)	(Atelier B)
Président: Marie-Rose SIMONI	Président: Martine VANHOVE
TAINÉ-CHEIKH Catherine <i>CNRS –LACITO – France</i> «Le(s) futur(s) en arabe. Réflexions pour une typologie»	MEJRI Salah <i>Université tunis – Tunisie</i> «La problématique de la dialectologie urbaine dans l’atlas linguistique de Tunisie»
KAMMENSJÖ Hélène <i>University of Gothenburg – Suède</i> «Discourse Connectives in Arabic Lecturing Monologue»	BEN HENIA Iteb <i>Paris 13 – France</i> «Séquences verbales figées en arabe dialectal tunisien et méthodologie»
GURAM Chikovani <i>Tbilisi – Géorgie</i> «Syntactic Constructions in Qashqa-Darya : Arabic dialect of Central Asia»	METHAMMAM-MESSAADI NARJESS <i>ISSH -Tunis – Tunisie</i> « Les quantifieurs en arabe tunisien »
SAKARNA Ahmad Khalaf <i>Mu'tah University – Jordan</i> «The Compound Numerals 11-19 in 9abady Arabic»	CLIPICI Maria <i>INALCO – France</i> «La transmission de l’arabe maghrébin en France aux descendants de juifs originaires de l’Afrique du nord, le cas d’une famille juive originaire de la Tunisie »
LANGONE Angela Daiana <i>Université La Sapienza – Rome – Italie</i> «Jeux linguistiques dans la masrahiyya , Le dé clic, écrite en dialecte marocain par Tayyeb Saddiqi»	GHOUL Hasna <i>ISEAH Mahdia – Tunisie</i> «Contact des Langues en Tunisie : Le cas des messages publicitaires»
ROTH Arlette <i>CNRS – France</i> «Les localisateurs spatiaux dans le parler arabe de Kormakiti (Chypre)»	FAYALA Wahid <i>INALCO – France</i> «Les spécificités linguistiques de La Chebba (Sahel tunisien, village qui se situe entre Mahdia et Sfax)»

21 septembre

(Atelier A)	(Atelier B)
Président: IRAQUI SINACEUR Zakia	Président: Xavier BLANCO
BOUCHERIT Aziza <i>Université Paris V –</i>	SIMONI Marie Rose <i>CNRS – France</i>

<i>France</i> « Enquête et traitement des données en dialectologie arabe»	«Conservation des données sonores»
DAROT Mireille <i>Paris 3 – France</i> «Lecture des questionnaires de l'Atlas Linguistique de Tunisie»	BOUALI Rachida <i>Université Mohammed Ier – Oujda – Maroc</i> «De la narration orale à la variété écrite (Cas des enfants marocains)»
WOIDICH Manfred <i>University of Amsterdam – Pays-Bas</i> «fi-objects in Egyptian Arabic»	
Président: Taïeb BACCOUCHE Table ronde: L'Atlas Linguistique de Tunisie	
<ul style="list-style-type: none"> - BEN AMOR Thouraya, <i>Faculté des Lettres et des sciences humaines de Sousse –Tunisie, Atlas Linguistique de Tunisie</i> «Lecture critique des questionnaires de l'Atlas Linguistique de Tunisie» - OUESLATI Lassaad, <i>LI-Paris 13, Atlas Linguistique de Tunisie</i> «L'enquête entre validation des questionnaires et qualité des données collectées» - AMRI Hichem & GHARIB Nizar, <i>Atlas Linguistique de Tunisie</i> «La numérisation des données» - MOSBAH Saïd, <i>ISET'COM Atlas Linguistique de Tunisie</i> « Traitement phonologique et représentation cartographique » - OUERHANI Béchir, <i>Atlas Linguistique de Tunisie</i> «La morphologie verbale du dialecte tunisien : Repères méthodologiques pour un traitement systématique» - LAJMI Dhouha, <i>Atlas Linguistique de Tunisie</i> «Le traitement lexical de l'Atlas Linguistique de Tunisie : le cas des poissons» 	
(Atelier A)	(Atelier B)
Président : Dominique CAUBET	Président : Hédi JATLAOUI
SIMEONE-SENELLE Marie-Claude <i>CNRS – France</i> «L'arabe parlé dans l'île de Dahlak Kebir, au large de Massawa, en Erythrée»	ZIAMARI Karima <i>Ecole Nationale Supérieure d'Arts et Métiers de Meknès – Maroc</i> «La construction SN dyal SN en code switching arabe marocain- français : les failles du Matrix Language Frame»
PROCHAZKA Stephan <i>University of Vienna Autriche</i> «The dialects of the Marg Ibn Amr Plain and the Hula Valley (Galilee) »	VANHOVE Martine <i>CNRS – LLCN – France</i> «Code-switching bedja-arabe ou nouvelle langue « mixte » ? Le cas d'un cordonnier bedja à Khartoum»
DE JONG Rudolph <i>University of</i>	GRIGORE George <i>University of Bucharest</i>

<i>Amsterdam Pays-Bas</i> «The dialect of the Mz,nih of South Sina»	– <i>Romania</i> «Code-Switching at Mardini Arabic speakers (Turkey)»
EL HABIB Ahmed <i>INALCO – France</i> «Le parler des jeunes de la région du Gharb au Maroc»	EMBARKI Mohamed* & ARNAUD Vincent** * <i>FRE CNRS 2425, Université Paul-Valéry, Montpellier III -France** Université de Franche-Comté (France) & Université Laval-Québec</i> «Variabilité acoustique de la voyelle [a] dans la séquence CaC en arabe marocain»
TCHOBANOVA Hristina <i>Sofia University – Bulgaria</i> «La structure du discours devant l'auditoire académique - quelques aspects de diglossia »	MILLER Catherine <i>Iremam, Aix en province – France</i> «Salience, marquage et prestige dans les processus d'accommodation dialectale»

22 septembre

(Atelier A)	(Atelier B)
Président : Jérôme LENTIN	Président : MESSAOUDI Leila
PICKETT Iain <i>School of Oriental and African Studies – London UK</i> «Dialect and Perception among some Syrian Bedouin tribes»	TAMER Youssef <i>Ibn Zohr University Agadir – Maroc</i> «What language situation do Moroccans favour : Arabicisation or bilingualism»
MAGRO Elgar-Paul <i>Université Paris 3 – France</i> «The intonation of finality and continuation in read and spontaneous Maltese speech»	GUIDO Cifoletti <i>Università di Udine – Italie</i> «À propos de la diffusion du lexique maritime méditerranéen en arabe dialectal»
LAMRANI Fatima-Zahra <i>Université Mohamed V – Maroc</i> «The use of Modern Standard Arabic in the Moroccan criminal courtroom and the problems of miscommunication»	MOSCOSO GARCIA <i>Francisco Faculté Mohamed V – Rabat – Maroc</i> «Le préverbe dans le dialecte arabe de la ville de Chefchaouen (nord du Maroc)»
PEREIRA Christophe <i>INALCO – France</i> «Eléments de description du parler arabe de Tripoli (Libye)»	BENABBOU Mostafa <i>Université Mohamed Ier – Oujda – Maroc</i> «Comportement linguistique et âge des locuteurs. Approche sociolinguistique du parler Oujdi»
AL-SEGHEYAR Mohamed <i>University of</i>	ZAMMIT Martin R. <i>University of Malta</i>

<i>Garyounis – Benghazi – Libya</i> «Patterns of Lexical Variation in Vocative Kinship Terms in Libyan Arabic»	« U n r e c o g n i z a b l e A r a b i c - M a l t e s e : T h e i n n o v a t i v e “ M a l t e s e ” e l e m e n t i n t h e M a l t e s e l a n g u a g e »
HAGGAG Imane <i>Paris III – France</i> «Etude syntaxique et sémantique des gros mots en arabe égyptien»	VICENTE Angeles <i>Université de Saragosse – Espagne</i> «Un dialecte arabe en situation d’immigration : la communauté marocaine de Saragosse»
Clôture	

日本中東学会年報(AJAMES)第21 - 1号投稿の締め切りについて他

1. 第20-1号の刊行について

刊行予定が大幅に遅れてしまい、まことに申し訳なく思っておりますが、ようやく出張校正も終わり、刊行の運びとなりました。執筆者ならびに査読をお願いした方々に改めて編集委員会からお礼を申し上げます。

2. 第20-2号の編集について

本年度第二号の第20-2号は2005年2月の刊行を目指して編集作業を進めていますが、今回も多くの方から投稿をいただき感謝いたします。なお、小特集は「前近代アラブ都市の政治運動と民衆文化」(英文)を予定しております。

3. 第21-1号投稿の締め切りについて

次年度の第一号(2005年9月刊行予定)AJAMES第21-1号の原稿投稿の締め切りは、2005年3月18日(金)とさせていただきますのでふるって投稿をお願いいたします。投稿規程は学会HPにあるとおりですので、よく読んで執筆をお願いいたします。書評(できれば英文)など歓迎いたします。また日本語以外の外国語(アラビア語・ペルシア語・トルコ語などでも)の投稿を歓迎しております。詳しくは、下記の編集委員会までお問い合わせください。

AJAMES 編集委員会

東京大学東洋文化研究所 長沢研究室気付

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

電話 03-5841-5887 FAX 03-3815-9565

電子メール nagasawa@ioc.u-tokyo.ac.jp

4. 査読体制についての説明

本誌の投稿原稿の査読については、2名以上の審査体制をとっておりますが、

地域・専門を異にする多くの学会員からの投稿に対応するために、編集委員以外の学会員の方に査読をお願いする場合がございます。欧米の学会をはじめ、編集委員以外の学会員が査読を行うことはかなり広く行われている制度ですが、この点をぜひご理解をいただき、本誌の発展に皆様のお力をお借りしたく考えております。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

以上の点に関する質問あるいはその他の提案など、どうかご遠慮なさらずにお寄せください。
(AJAMES 編集委員会 長沢栄治)

第 21 回日本中東学会年次大会研究発表応募状況など

2005 年 5 月 14・15 日の 2 日間にわたり国立民族学博物館（大阪府吹田市）において開催予定の第 21 回日本中東学会年次大会に関しまして、前号でお知らせしましたように、報告者の募集を昨年 11 月末日に締め切りました。おかげさまで、約 40 名の方々から応募があり、現在、これら報告予定者の方々に大会プログラム用の要旨を依頼しています。具体的な報告者名・タイトル・タイムテーブル等は、3 月刊行予定のニューズレター次号に掲載する予定です。

年次大会についてお問い合わせなどございましたら、下記の大会実行委員会事務局までお願いいたします。

第 21 回日本中東学会年次大会実行委員会事務局

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

国立民族学博物館 西尾哲夫研究室（臼杵陽研究室から変更）

Tel: 06-6878-8319

E-mail: jameet@idc.minpaku.ac.jp

日本学会事務センター破産後の対処について

ニューズレター前号でもお知らせしました通り、本学会が AJAMES のバックナンバー販売などを委託していた日本学会事務センターが昨年 8 月に破産しました。この間の経過と事務局および理事会の対処についてあらためてここにご報告申し上げます。

2004 年 8 月 13 日、学会事務局に日本学会事務センターからファックスで「民事再生申立・保全管理命令のお知らせとお詫び」が届いていましたが、同 31 日

には同センターは東京地方裁判所から破産宣告を受けました。学会事務局にはただちに破産管財人となった弁護士から連絡が入り、事務局は破産債権額の確定、顧客データおよび AJAMES バックナンバー在庫の事務局への返却の手続きに入りました。顧客データは9月21日に事務局に返却されました。10月5日、事務局から「学会誌バックナンバー・書籍等の返却に関する依頼書」を提出し、AJAMES バックナンバー在庫分もすでに事務局に返却されております。

9月22日に破産管財人から破産債権額確定のための資料として仕入れ明細表が届き、これに基づき、10月18日に「破産債権届出書」を提出しました。そこでの本学会が同センターから回収すべき金額は AJAMES19-1 号までのバックナンバー販売料金 243,600 円となっています。また、バックナンバー在庫返却に関わる送料以外の諸費用 13,965 円も当方で負担せざるをえませんでした。

10月30日の理事会では、本号「2004年度第2回理事会報告」4ページにもありますように、同センターに委託していた業務を当面学会事務局が引き受けること、破産債権については回収の見込みがまったくなく、訴訟等もほぼ無益であるとの判断からそうした手段は一切取らないことが決定されました。

本学会としましては、ひとえに学会運営の効率化のために同センターへの一部業務委託を積極的に進めてきたわけですが、破産という事態は予想だにしない出来事であり、痛恨の極みです。結果として、会員の皆様からお納めいただいている貴重な年会費の一部を失うこととなってしまいましたことを深くお詫び申し上げます。

学会への入会希望者がおられましたら、学会ホームページの「日本中東学会について」をご覧ください。学会概要、会則、入会案内が掲載されており、入会申込フォームをダウンロードできます。また、学会事務局までご連絡いただければ、入会案内と申込フォームをお送りすることもできます。

寄贈図書

【単行本】

サイド・ムジタバ・ムサウィ・ラリー著 『イスラーム教徒の目で見た西洋文明』

Foundation of Islamic Cultural Propagation in the World.

三笠宮殿下米寿記念論集刊行会編 『三笠宮殿下米寿記念論集』 刀水書房、2004.

Sayyid Mojtaba Musavi Lari, God and His Attributes: Lessons on Islamic Doctrine, Book One, translated by Hamid Algar, Foundation of Islamic Cultural Propagation in the World, 2003.

【逐次刊行物】

『季刊アラブ』 vol.110、日本アラブ協会、2004.

『季刊アラブ』 vol.111、日本アラブ協会、2004.

会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2005 年度分未納の方には郵便振替
払込用紙を本ニュースレターに同封させていただきましたので、ご利用く
ださい。未納分の払込確認後、AJAMES の該当号をお送りいたしております
。また、本年 1～2 月に実施予定の本学会 2005/2006 年度（第 11 期）役
員選挙にあたり、2004 年度会費納入をもって有権者資格が得られることにな
っておりますので、ご注意ください。

事務局より

2005 年最初のニュースレターをお届けいたします。遅ればせながら、今年一年
の会員の皆様のご活躍とご多幸をお祈り申し上げます。また、世界の戦火
と災害の爪あとが少しでも癒されていくように祈願したいと思います。

学会ニュースレターも本号で記念すべき 100 号となりました！次期役員選挙に
ついてお知らせする号としては例年より発行時期がずれこんでしまい、申し訳あ
りません。これから、役員選挙や、学会事務局・地域研究企画交流センターが置
かれている国立民族学博物館での年次大会が控えていますが、本事務局としての
ゴールも見えてきた感じもいたします。ラストスパートでがんばります。引き続
きご協力のほど、どうぞよろしく願いいたします。 （臼杵 陽）

- ・ 会員名簿のデータ更新を行います。同封の調査票を **2月28日**までにご返送く
ださい。
- ・ AJAMES 第 21-1 号の原稿投稿の締め切りは、**3月18日**です！

日本中東学会ニューズレター 第 100 号

発行日 2005 年 1 月 25 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷

日本中東学会事務局

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
国立民族学博物館
地域研究企画交流センター気付
TEL & FAX 06-6878-8367
E メール : james@idc.minpaku.ac.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>
郵便振替口座 : 00140-0-161096
銀行口座 : 三井住友銀行渋谷支店
普通 No. 5346808